

一般部門 佳作

水仙と盆の日

小川 英志

「水上勉文学の風景写真展」で、私は若狭へ赴きました。日は平成二十二年十月の二十三日。朝方にJR線で大阪を発ったのです。

会場は若州一滴文庫の、くるま椅子劇場で、展示コーナーも熱気があふれていました。その日、水上先生を偲ぶ七回目の帰雁忌を迎えて、肅然とした空気に吞まれました。数多い作品の中の愛読書に関わりのある、写真展に応募して選に拾われたものの、元々カメラの素養に乏しく戸惑いました。とりわけ各作品の写した動機の添え書きに興味を湧き時間を忘れるほどでした。

私は写真と対(つい)になる文学作品に、平成元年に講談社が出版している、『才市』を選び第2章の書き出しを軸にしています。

△才市の生まれた温泉津は、島根でも中央部といつてよい。浜田と大田の中間にある、海岸の小村だ▽

大田市は私の故郷ですから、この作品に格別の愛着を覚えており、コメントを感じ入るまま、以下のように記しました。

△水上勉氏は、『才市』の取材で当地を踏んだ折に、温泉津港の辺りを散策している。そのときのスナップ写真に、ある読本で出合っていた。枯淡にしてダンディだった▽
出展した写真は八月の盆帰省の際に、ちいさな買物で温泉津本町へ走り、通りすがりに心うごかされ、長男のアドバイスで撮った一枚。光と陰影の妙に惹きつけられたのです。

長く切れ込む入江は、中ほどに横たわる防波堤で、沖合と浜辺に二分され藍鉄のさざ波が、金色に揺らめきミステリアスです。左手かなたの灯台は、ちびた鉛筆に似て、タラップは風に吹かれるかに、頼りなげでした。

片や西方の連山の背は恐竜を連想させ、黒々と外海に落ち込み岬になっています。薄い帯状の雲は沈みかけた陽に透かされ、銀箔のステンドグラスの趣があります。

先生は労作『才市』の取材で昭和五十年頃から十数年掛け、当地を広域に歩いたと。墓参は三度に及ぶと知り、私は翌年正月の七草粥の日に、水仙を手に山陰線の低い鉄橋をくぐり、墓地に向かいました。すぐに「妙好人・才市の墓」と記す、背高い松の立て札が招くかに、目に止まりました。

才市さんの旧居は、温泉津駅前の通りを海寄りに歩いて数分、立ち寄ると落ち着きます。いつも無人ながら、線香の匂いがただようのです。上がり口のすぐのスペースに、かんな・のみ・木槌・手提げ道具箱・緒の切れた女下駄などが、無造作に並んでいます。

九州遠賀川で草臥(くたび)れた船を陸に上げ、日ごと虫穴を埋めるのを生業として、齢六十をすぎ二十五年ぶりに、温泉津小浜に戻り余生を下駄作りに励んだといわれます。道具類に手垢らしい痕が滲み、その来歴に想いをいたし、つい瞑目しました。作家は当家を来訪する度に、部屋の佇まいを堪能したようです。じっくり観察して書きながら、多くの課題を見つけ、対峙する姿勢に共鳴して『泥の花』も味読しました。

私事ながら境内に日本海の風が、季節によって吹きもする、真宗F寺と昔から交流を頂ぎ、先代住職は、浅原才市翁顕彰会の会長でした。遠い日に父の仏事の折、説教で才市の詩(うた)の一片を唱えたのでした。

「ぐちをおこな ひとにかかるぞ

ひとにかかれば ひとがおちるぞ

ぐちはだいでく(大毒)」

ましな境涯にいても、ぐち多く不平を鳴らし和をこじらす人。たぶん心に感謝の血が通っていないのかも……。

「ごんうれしや なむあみだぶつ」

水上勉様そっくりの、説得力のある静かな語り口を忘れません。令和になり初めての、盆帰省の日が近づいてきます。